

# 盆栽の図像学

はちうえ

## 第十九回

### 浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

### 歌川芳虎《座しき八景の内 上漏の松の雨》 水野年方《今様美人 六》

解説／田口文哉

#### 如雨露

盆栽を含め、植物の水遣りには欠かせないじょうろ。水を貯える容器から細い管がつながり、細い水流を生じるはず口と呼ばれる、ハスの実によく似た部位が付けられた道具である。このじょうろであるが、漢字で書くと「如雨露」となり、いかにも当て字然とした文字で記される。じょうろに関する研究はほとんどないようであるが、ことば自体は、ポルトガル語の「Jato」、さかのぼってはアラビア語の瓶や壺を意味する語「ジャラー」に相当すると言われている。いずれにせよ、「テンブラ」などと同じように、近世以後に渡来した文物の一つが現地音のまま日本で通用したものだと言えることができるだろう。

浮世絵版画の中にも、こうした舶来の品、じょうろで水をやっていくつか見ることができ、早いものでは寛政前期（18世紀末）の北尾政美による、『女風俗花宴 六』に描かれることが紹介されている（『江戸園芸花尽し』（太田記念美術館）解説より）。今月は、そうしたじょうろの図像が描かれた、園芸史の資料としても大変興味深い二図の作例を紹介したい。

#### 団扇絵

紹介する図は、江戸時代と明治時代それぞれに制作された図である。上の絵は、江戸時代末期のもの。中心には女性の半身像があらわされ、右手には勢いよく水が出ている、当時のじょうろを持つところである。まずはこの図に描かれている内容を見る前に、絵の枠に注目してみよう。半身像の下部が、白くえぐられたように色が刷られておらず、絵の四隅も円く抜かれてくる。このかたちはすなわち、夏に付き物の団扇形をしているのである。つまり本図は、

実際に切り抜いて団扇の骨組みに貼られて用いられていた、浮世絵版画における「団扇絵」と呼ばれるジャンルの一枚なのである。実用されたために現存する品が少なく、資料的な価値が極めて高い作例でもある。

#### じょうろを持つ女性

次に描かれた図像を確認してみよう。庭に設置されたおそらく二段式の棚に鉢植を五点確認できる。上段右は雲と波の文様を上下に、宝珠があらわされた染付鉢に植物が植えられ、中央の丸つばの鉢にはサボテン、左は籠目文様の鉢に石付きの草の草が植えられている。下段右には蘇鉄の頭のみが見え、その左にじょうろで水をかけられている五葉松が描かれている。

女性が頭に付けたかんざしには、金属製のトノボの作り物が付けられており、題名が記された題箋の枠飾りには見事な松があらわされているように、細部に意匠が施された一点である。絵の内容は、じょうろで松に水をかけているところと要点がある。題名に「座敷八景」や「松の雨」とあるように、本図は絵や歌の題として盛んに用いられた近江八景のうち、「唐崎の夜雨」を見立てたものとなっている。本連載の第十二回（2011年12月号）に喜多川歌麿の図で紹介したように、この景の唐崎には、唐崎神社と唐崎の松があり、当地の夜の雨の情景が名所絵として記憶されているのである。本図の背景が、鉢植に水をやっていくつかかわらず暗い夜の情景であるのも、「夜雨」を見立てているからこそその表現なのである。さらに本図の場合、「上漏」すなわち「じょうろ」と、水をかける「女郎」とが掛け合わされた、ことば遊びをも組み込んでいるのである。

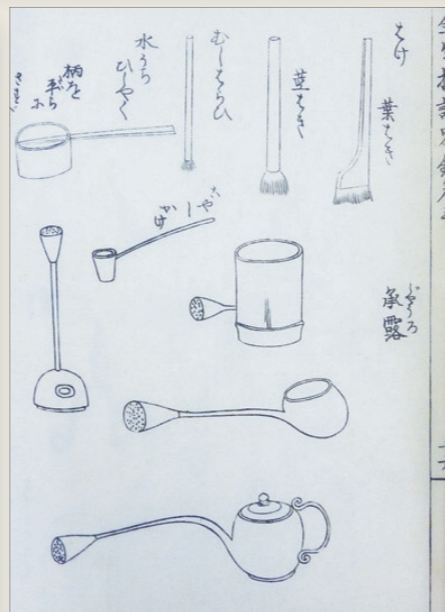
本図におけるじょうろは、管も短く、貯水容器も手元のごく小さな部位のみである。おそらく

く女性は左手に桶を持っており、頻繁に水を汲んでいるものと思われるのである。このじょうろに対して、左下の図のじょうろは、現在のものと同じ形態である。次はこちらの図を見てみよう。

#### じょうろのいろいろ

左下の女性が持つじょうろは、その色や持ち手の形状から銅などの金属製と思われる品である。既に天保8年（1837）の園芸指南書である『草木育種後編』（阿部喜任）には、水差しを「銅（あかがね）」で作ると良いと記されている。参考図版としてあげた文政13年（1830）の園芸書『金生樹譜別録』（長生舎主人）の「盆具（はちうえどうぐ）」の項目には、今回取り上げた絵にも描かれたものを含め、さまざまな形態のじょうろが描かれている（残念ながら文字による解説はない）。太筒の竹が用いられたものや急須のような形状の品など、いずれもはず口が付けられた「承露（じょうろ）」である。

今月は、大変珍しい団扇絵にあらわされた、画題としても貴重なじょうろを描いた図を紹介した。じょうろの歴史がどのようなものであるか、そうした身近なもののテーマを探していくうえで、こうした浮世絵版画の歴史的な資料としての価値は高いと言えるだろう。（続く）



『金生樹譜別録』下巻（さいたま市大宮盆栽美術館蔵）

上図：歌川芳虎《座しき八景の内 上漏の松の雨》  
団扇絵 22.3×28.5cm 天保14年～弘化4年(1843～1847) 版元／有田屋清右衛門 個人蔵  
下図：水野年方《今様美人 六》  
大判錦絵 24.8×36.8cm 明治32年(1899)3月20日 版元／秋山竹右衛門 個人蔵

浮世絵師紹介  
歌川芳虎（うたがわよしとら）文政11年～明治20年（1828～1887）幕末から明治時代にかけての浮世絵師。歌川国芳に入門し、20年近くを過ごす。役者絵や風刺画、明治期以降は開化絵など、時代に則した絵を描き続けた。

水野年方（みずのとしかた）慶応2年～明治41年（1866～1908）明治中後期の絵師。浮世絵師として画業を出発し、後に絵筆による本画制作を主とする日本画家として自立していった。日本画のような淡彩による画風に、新時代の浮世絵版画の表現が見られる。

著者プロフィール  
田口文哉（たぐち・ふみや）さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。さいたま市大宮盆栽美術館初の花もの盆栽展！ さつき盆栽作家・磯部繁男氏の協力のもと、見ごろを迎えるさつきの花で、ギャラリーを華やかに彩ります。会期：6月8日(金)～6月20日(水)（毎週木曜休館）  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知  
■さつき盆栽展「華花（さつきのはな）」  
大宮盆栽美術館初の花もの盆栽展！  
さつき盆栽作家・磯部繁男氏の協力のもと、見ごろを迎えるさつきの花で、ギャラリーを華やかに彩ります。  
会期：6月8日(金)～6月20日(水)（毎週木曜休館）  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091